



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	医学部・保健医療学部 1 年生の離島地域医療実習における「気づき」 —実習後のレポートおよびグループ学習発表記録の分析から—
Author(s)	田野, 英里香; 石川, 朗; 片倉, 洋子; 寺田, 豊; 石井, 貴男; 高橋, 延昭; 山田, 恵子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 13 号: 95-103
Issue Date	2011 年
DOI	10.15114/bshs.13.95
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6373
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

医学部・保健医療学部1年生の離島地域医療実習における「気づき」 —実習後のレポートおよびグループ学習発表記録の分析から—

田野英里香¹⁾、石川 朗²⁾、片倉洋子¹⁾、寺田 豊³⁾、石井貴男⁴⁾、高橋延昭⁵⁾、山田恵子⁶⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

³⁾ 札幌医科大学医学部地域医療総合医学講座

⁴⁾ 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

⁵⁾ 札幌医科大学医学部附属臨海医学研究所

⁶⁾ 札幌医科大学医療人育成センター、教養教育研究部門

医学部・保健医療学部1年生を対象にした利尻島における「離島地域医療実習」の参加学生の実習後レポートと、学内におけるグループ学習の発表記録の記述内容を分析した。その結果、レポートからは「人々の温かさ・優しさ・つながりの強さ」「離島独自の生活習慣を把握する大切さ」「今まで知らなかった離島の良さ」「島の仕事の大変さ」「島の自然の豊かさ」「医療者としての患者との関わり大切さ」「島民の生活や状況に沿った医療を行うことの重要性」「地域医療への関心やモチベーションの向上」「医療者および札幌医大に対する島民の期待の大きさ」「離島医療の現状の厳しさ」の10の「気づき」が抽出された。グループ学習での発表記録において、学生は、家族総出でなされる島での仕事の様子や、島民同士の支え合いや死亡事故に対する島民の悲しみの共有から、「人々の仕事に対する誇り」や「人々のつながりの強さ」を具体的な言葉で表現した。レポート記載やグループ学習が学生の気づきを促し、利尻島に暮らす人々の生活や離島医療に対する理解を深めていった。

キーワード：離島地域医療実習、生活体験、気づき、グループ学習

Perceptions of first-year students of the School of Medicine and School of Health Sciences who participated in "Community Health Care Practice on Rishiri Island" —Analysis of their reports and group presentations—

Erika TANO¹⁾, Akira ISHIKAWA²⁾, Yoko KATAKURA¹⁾, Yutaka TERADA³⁾,
Takao ISHII⁴⁾, Nobuaki TAKAHASHI⁵⁾, Keiko YAMADA⁶⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Physical therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Community and General Medicine, School of Medicine, Sapporo Medical University

⁴⁾ Department of Occupational therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

⁵⁾ Marine Biomedical Institute, School of Medicine, Sapporo Medical University

⁶⁾ Department of Liberal Arts and Science, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

Community Health Care Practice on a Remote Island was held in Rishiri for students in the first year of the School of Medicine and School of Health Sciences of Sapporo Medical University. The students wrote reports and made presentations about their learning and perceptions of the practice. To determine the level of their cognizance, the reports and presentation documents were analyzed. In these reports, 10 categories of cognizance were found: "Warmth, kindness, strong relationships between people", "Importance of understanding the lifestyle", "New findings of good things about the island", "Hard work on a remote island", "The rich natural environment on Rishiri", "Importance of a strong relationship between patients and medical staff", "Importance of providing medical care following peoples' expectations", "Improvement of interest and motivation for community health care", "High expectations of people for the medical staff and Sapporo Medical University", and "Severity of the current situation on the remote island." Moreover, in their presentations, students noted "The islander's great pride in their occupations" and the "Strong relationships between people." Writing papers and group learning improved the students' cognizance and understanding of the people's lifestyles and the situation of community medicine on Rishiri.

Key words : community health care practice on remote island, living experience, perceptions, group learning

Bull. Sch.Hlth.Sci.Sapporo Med. Univ 13:95-103(2011)

はじめに

本学では、平成19年度の文部科学省特色ある大学教育支援プログラム（以下特色GPとする）に採択された「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」の中の『離島地域医療実習』が2年目を迎えた。この実習はすでに報告しているように¹⁾、医学部および保健医療学部在籍する1年生を対象としたもので、生き物（命）を知るための「生物実習」、島の暮らしを知るための「生活体験」、離島保健医療を学ぶための「医療実習」の3つの柱から構成されている。この3種類の学習は一見関連がないように見えるが、学生にとってこれら3つの体験は、医療者として重要な生命への畏敬の念、多様な地域・生活・人間のありように対する感性を養う機会になると思われる。すなわち、生物実習による発生現象の理解は生命の誕生および生物を深く広く知ることにつながり、生活体験および医療実習は都市部とは異なる離島の自然・生活状況を体験的に理解し、そこに生じている健康課題、予防医療や緊急医療体制などの離島における医療の特徴について理解することにつながっていくであろう²⁾。

このような体験型の実習に学生が参加すること自体に意味があると考えられるが、離島地域医療実習は「体験すること」が本来の目的ではない。学生は体験を通して多くを学んでいくが、実習での学びを深めるためには実習後に自らの体験を思い出し意味づけを行うことが重要である。このような実習後に行われる作業は、学習者自身が自らの知識や体

験、感情などを見つめ、意味を構築するプロセスを作り出すものであり³⁾、学生自らが感じたことや気づいたことを大切に、経験の意味づけをすることで根柢の持った意欲行動へつながっていく⁴⁾。このような観点から、我々は本実習に参加する学生に対して、昨年と同様に実習前に自己目標をたて、実習後に目標に対する評価を含めたレポートの提出を課し、さらに後期の地域医療合同セミナーⅠの授業の中で、実習での体験や体験で感じたこと等を個人やグループで見つめ直す学習を行った。体験によって学生は多くのことに感動し、新しい気づきを得ている。しかし、体験しただけでは、自己の気づきが意識化されず、体験型学習効果を高めることが出来ない。単に漠然と実習に参加するのではなく、実習を通して何を知りたいのか、学びたいのかを自らに問いかけることは、実習に能動的に参加するための力となり、実習終了後のレポートの記述やグループ学習は学生自らが体験を通して学んだことを意識化し確認していく作業⁵⁾となる。

学生はレポート作成や、地域医療合同セミナーでのグループ学習とその発表準備を通して、実習のあらゆる場面で様々なことを感じ、学んできたことを表現していた。特にグループ学習において自己の「気づき」を言語化し、それらを仲間と共有することで、新たな気づきや体験の意味付けが深まっていった。本報告では、このような「気づき」を言語化して自分と向き合うという作業を通し、離島実習参加が学生にどのような学びや発見をもたらしたのかを知る目的で、実習後のレポートやグループ学習での発表記録を分析した。

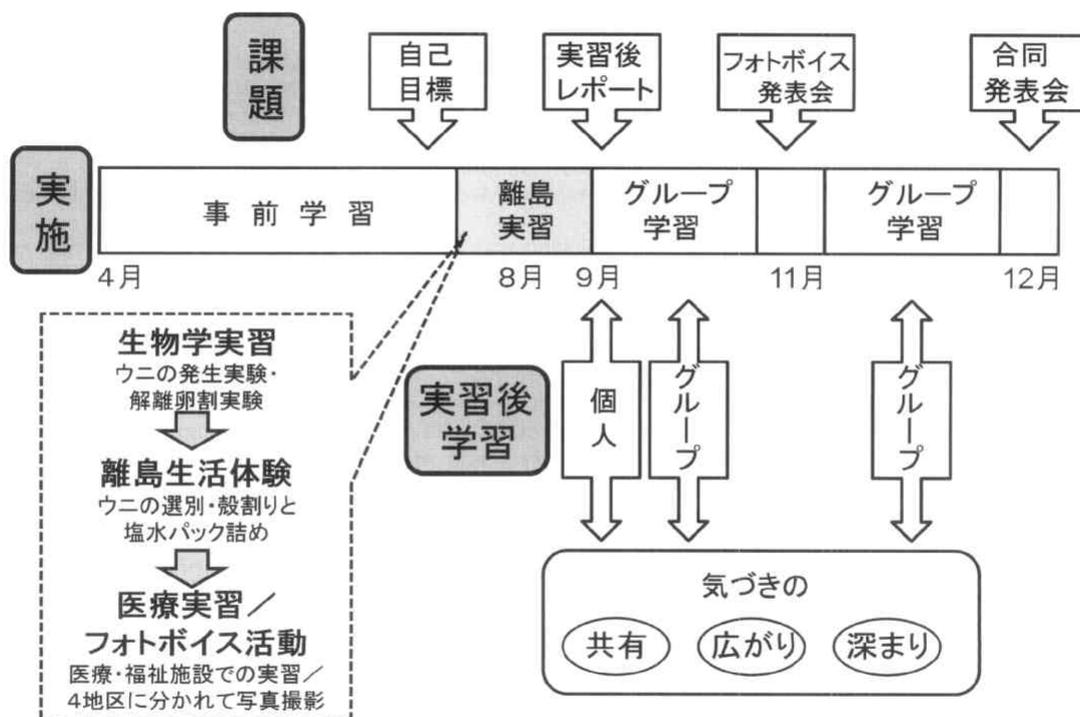


図1 離島地域医療実習における学習内容の流れ

実習の概要

利尻島における離島地域医療実習は、4泊5日の日程で行われた。平成21年度の参加学生は医学部医学科21名、保健医療学部看護学科6名、理学療法学科6名、作業療法学科3名であった。学生は学部混成の6名以内の小グループを作り、「生物学実験」、「離島生活体験」、「医療実習」、「フォトボイス活動」の順番(図1)で行われた実習に参加した。それぞれの体験の内容を以下に示す。

1) 生物学実験：ウニの発生実験および解離卵割実験を行った。

2) 離島生活体験：利尻島の重要な産業であり住民の多くが従事している水産加工に関わる実習を行った。神成漁業部ではウニ漁から戻った船の側でのウニの選別、殻割りなどの体験、高橋水産ではウニの塩水パック詰め体験を行った。ウニの選別では大きいウニのみを殻割りに回し、小さいウニは海に戻す作業を行った。

3) 医療実習：グループごとに異なる島の医療施設で実習を行った。学生は2～6名のグループに分かれ、利尻島の4地区(鴛泊、鬼脇、仙法志、杵形)にある病院・診療所、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、地域包括支援センター、訪問看護ステーションにおいて各施設におけるプログラムへの参加、訪問看護への同行などの体験を行った。

4) フォトボイス活動

地域住民が写真を用いて、地域の強みや課題を追求する参加型アクションリサーチの手法であるフォトボイス活動⁵⁾を、医療実習が行われた4地区で行った。地元の方の案内で、「利尻島の人々の生活」を写真におさめ、当日あるいは帰校後グループの話し合いを通じて島の人々や生活への理解を深めた。鴛泊地区では漁港、フェリーターミナルにおける出発見送りの旗振り体験、ホテルで働く人々の見学などを行った。杵形地区では保健師の家庭訪問への同行や地区の散策を行った。仙法志地区では昔の機材や方法でとろろ昆布の製造が行われている様子見学と利尻の土地や歴史について話を聞いた。鬼脇地区では陶芸教室で陶芸の体験と陶芸をしている方々との交流を持った。

なお、本実習では両学部及び医療人育成センターの教員7名が同行し、滞在中の生活のサポートや調整、実習の引率・指導などを行った。

離島実習のレポート課題と提出方法

レポートは実習前に記載する「自己目標」と実習後に記載する「自己目標に対する自己評価」および「実習全体を通してのふりかえり」から構成されている。自己評価には実習終了後、実習前にたてた自己目標に対する評価を記載させた。実習全体を通してのふりかえりには、体験から感じたこと、考えたこと、感動したことなどを自由に記載さ

せた。学生は学内ウェブ上につくられた「実習支援サイト」にアクセスし、提出した。レポート提出後、教員はウェブ上でレポートに対するコメントを記載した。

地域医療合同セミナーIでのグループ学習

離島実習終了後、地域医療合同セミナーIの後期の授業で、離島地域医療実習のふりかえり教育を行なった。具体的には(1)フォトボイスを実施した地区に分かれたグループ学習において、各自が撮影してきた写真をもとに地域で感じたことや考えたことなどを話し合い、選択された写真にボイスをつけた。(2)離島地域医療実習全体に対して、医療実習別のグループ学習を行ない、各自の気づきや感動を共有し、言語化した。(1)、(2)共に1～2名の教員がグループを担当し、助言を行ない、グループ学習の成果を(1)はセミナーIの時間内に、(2)は地域密着型チーム医療実習・離島地域医療実習合同報告会で発表した。

方 法

分析対象：①レポート：平成21年度離島地域医療実習参加学生36名中、33名から提出があったが、記入不備を除いた30名分のレポート、②学内におけるグループ学習の発表記録：フォトボイス活動発表会と合同報告会のスライドと発表原稿。

分析方法：①提出されたレポートおよび②発表記録としてのスライドと発表原稿に記載されている内容を繰り返し読み、「離島での生活体験・自然観察」および「医療実習体験」に分けたうえで、学生の気づきが記載されている文章を抽出した。以上の作業は複数の研究者で行い、分析結果の妥当性、一貫性の確保に努めた。

倫理的配慮：本研究の報告にあたり、対象学生に研究の趣旨を説明し、協力は自由意思であること、協力の有無による不利益は生じないこと、匿名性は保持されることを説明し、承諾を得た。

用語の定義：

気づき：人・物・事に見て・聞いて・触れるという直接的な体験から学生自身が感じたこと・学んだことを「気づき」と定義した。

結 果

本論文では、地域医療実習に参加した学生が実習後に記載したレポートと実習終了後のグループ学習での発表記録から学生の「気づき」に着目して分析した。

I レポートの記載内容

レポートの記載内容からの気づきについて、1.生活体験・自然観察(表1)と2.医療実習体験(表2)にわけて分析した。

1. 生活体験・自然観察における気づき

学生の記載内容から抽出された気づきは、1) 人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ、2) 離島独自の生活習慣を把握する大切さ、3) 今まで知らなかった離島の良さ、4) 島の仕事の大変さ、5) 島の自然の豊かさであった。以下これらのカテゴリーに沿って学生の気づきについて記す。文中の『』内はサブカテゴリー名を示したものである。

1) 人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ

気づきのサブカテゴリーとして『島民の優しさ・温かさを実感した実習』『島民のつながりの強さ』の2つが抽出された。多くの学生が、実習の中で島民の方々の温かさに触れることができたことと記載していた。さらに学生は島の人々と関わる中で、人々が島の物や住人について詳しく知っていることに驚き、島民どうしのつながりの強さを感じ、つながりの強さや信頼されることの大切さを実感した。

2) 離島独自の生活習慣を把握する大切さ

学生は離島での生活体験等を通して、離島独自の生活習慣を把握する大切さに気づいた。『離島ならではの生活習慣』『地域の生活を知ることの大切さ』の2つのサブカテゴリーが抽出された。漁を中心とした生活のリズム、売り物の昆布が家の前に干してある風景や信号機のない道に対する驚き、札幌とは全く異なる生活習慣への気づきを記していた。また体調がすぐれなくても、漁がある時には漁を

優先させ病院いけないという利尻ならではの事情に驚き、地域を知るためには実際に島の生活に触れ、そこに住む人々と触れ合うことが大切であることを実感していた。

3) 今まで知らなかった離島の良さ

実習前に学生は、島の生活に対して「不便である」「つまらないだろう」というイメージが大変強く、大変さや困難さのみに意識を向けていた。しかし、実際に島を訪れ、島の生活を体験し、島民と話すことで『離島の良さ』を実感し、『島に対する印象の変化』を感じていた。

4) 島の仕事の大変さ

今回の実習で実際にウニの選別や殻割りなどの漁業に関する体験を行ったことで、ウニの選別作業の腰の辛さやウニが出荷されるまで手間がかかることを知り、『漁業の辛さ・大変さ』を実感した。さらに、後継者がいない、若い働き手がいらないなど『島の仕事の厳しい現状』に気がつくことができた。

5) 島の自然の豊かさ

島の中央に位置し、島のどこにいても見る事が出来る利尻山の姿やボランティアの方による夕日見物、温泉周辺の豊かな自然に感動していた。

2. 医療実習体験における気づき

医療実習体験に関して、1) 医療者としての患者との関わり大切さ、2) 島民の生活や状況に沿った医療を行う

表1 生活体験・自然観察における学生の気づき【レポートから】

学生の気づき		具体的な記述例
カテゴリー	サブカテゴリー	
人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ	島民の優しさ・温かさを実感した実習	「気さくに対応してくれたおかげで、暮らしぶりはもちろん人の温かさを痛感した」「島民の温かい人柄があって、生活体験ができた」「利尻島の皆さんは本当に親切で、温かい人たちだった」
	島民のつながりの強さ	「驚くほどに人々が島の物・人について詳しく、いかにつながりの強い生活をしているかを理解できた」「“つながりの強さや信頼されることの大切さ”を実感することができた」
離島独自の生活習慣を把握する大切さ	離島ならではの生活習慣	「島の生活が漁を中心としたライフスタイル・生活リズムであることを学んだ」「漁のために早起きし、忙しいときはほとんど寝ないなど漁の時期の大切さを知った」「家の前に昆布が干してある、信号機が全然無い、ガソリンが高いなどの発見があった」「自分の地域とは全く異なる生活習慣を知ることができた」「島民は漁が忙しいと病院に行けないことに驚いた」
	地域の生活を知ることの大切さ	「離島に住む人々の生活や風習、考え方などその地域について色々なことを知らなければいけないということを学んだ」「実際に島の生活に触れそこにいる人たちと話さないとその地域のことはわからないということが、今回の実習で改めてわかった」
今まで知らなかった離島の良さ	離島の良さ	「島の不便なところと合わせて良いところも知ることができた」「都市より狭いけど、島なりの楽しみがあって静かで元気なところだった」
	島に対する印象の変化	「島の暮らしはつまらないだろうと思っていたが違った」
島の仕事の大変さ	漁業の辛さ・大変さ	「ウニの選別作業の腰の辛さに驚いた」「ウニの選別、殻割り、食部の取り出しなど出荷までに大変手間がかかることがわかった」
	島の仕事の厳しい現状	「後継者がいなくて厳しい環境で年配の方が働いている事に気づかされた」
島の自然の豊かさ	島の自然の豊かさ	「利尻島の自然の豊かさに感動した」「夕日見学や、温泉への行き帰りの道で利尻のすばらしい自然を見ることができ、感動した」「島の自然のすばらしさに驚いた、非常に貴重な体験だった」

表 2 医療実習体験における学生の気づき【レポートから】

学生の気づき		具体的な記述例
カテゴリー	サブカテゴリー	
医療者としての患者との関わりの大切さ	コミュニケーションの難しさと大切さ	「コミュニケーションの大切さ、難しさを感じた」「診察で院長先生が 1 人 1 人の訴えをしっかりと聞いていた点が印象に残っている」
	医療者と島民の近い距離	「患者と医療従事者との関係性が近く深い気がした」「病院では、医師、看護師と患者の距離が近くて、患者は何でも思ったことやしてほしいことを聞かれなくても自分から言っていることが印象に残っている」「看護師は利用者と家族のように接していた。普通の病院の医療者と患者の関係より、はるかに距離が近かった」
島民の生活や状況に沿った医療を行うことの重要性	島民の生活背景や状況に沿った医療の大切さ	「離島は島の人達の生活に医療を合わせる必要があると感じた」「患者一人一人の性格や生活実態まで把握して人として患者を診るということが理解できた」「高齢者医療は劇的な回復を期待するのではなく、高齢者のQOLを少しでも維持するために行うことが大切であると島に行き行って感じた」「利尻のように多くの人が漁業の携わるような地域では多少無理してでも働かなくてはならない時期が確かに存在するので、それを踏まえた医療の在り方が必要になってくると感じた」「訪問看護では、ただ症状を見るだけではなく患者さんの生活背景にまでも目を向けることの大切さを学んだ」
	地域で働く医療者はその地域を知ることが必要	「地域医療はやはり地域やそこに住む住民を知ってこそ成り立つのだろうと感じた」「医療というものはその環境にあった形であらなければならないし、その仕事に就く人もその環境についてしっかりと理解していなければならないと感じた」
地域医療への関心やモチベーションの向上	地域医療に対するモチベーションの向上	「地域医療に対するモチベーションが高くなるのを感じた」「自分の中にある医師になりたいという強い思いがわきあがり、モチベーションをあげることができた」「地域医療はととても大変だと思うが、すごくやりがいがあるのだろうと今まで考えていたよりも思えるようになった」
	島で働く医療者や島民からの刺激	「島で医療に携わる人も、島の医療にやりがいや誇りを持っていて素晴らしい」「島民は離島での生活を楽しんでいることを知り、自分もそういった思いに応えられるような地域の医師になりたいと、決意を新たにすることができた」
	今後の展望と自己課題の明確化	「地域医療の厳しさも実感したが、同時にやりがいも感じ、自分の将来のビジョンが見えてきた」「学生のうちに多くの地域を見て歩き、地域の医療の現状と住民の方々と触れ合うことで、自分が何をすべきか明確になると思った」「座学で学べないことの多さに驚かされ、再び、今度は単身で在学中に地域医療の診療所をまわってみたいと思った」
医療者および札幌大に対する島民の期待の大きさ	島民の医療に対する期待	「島民がどれだけ医師を必要としているかを感じた」「離島の医療ではどの分野にも対応できる力が求められていることがわかった」「利尻島で求められている医療の形、北海道本土と海で隔たれているため、本土のいわゆる地域と呼ばれる市町村よりも、さらに『何でも診ることができる』医療施設が必要とされているのではないかと感じた」
	地域医療における札幌大の役割	「この実習への島民の期待と札幌大が地域医療に大きな役割を担っていると感じた」
離島医療の現状の厳しさ	離島の産科の現状	「島では基本的には子供が産めないのが、産む前に島を出ないといけないということがわかった」
	離島のリハビリの現状	「利尻の病院には理学療法士がいないという現状を知った」

ことの重要性、3) 地域医療への関心やモチベーションの向上、4) 医療者および札幌大に対する島民の期待の大きさ、5) 離島医療の現状の厳しさの5つのサブカテゴリーが抽出された。

1) 医療者としての患者との関わりの大切さ

医療実習では、実際の医療現場での体験を通し、コミュニケーション力の不足を知り、『コミュニケーションの難しさと大切さ』を感じていた。病院で患者が思っていることやして欲しいことを積極的に医療者に話している姿や利用者に対して家族のように接する看護師の姿を見ることで『医療者と島民の近い距離』に気づいた。どの記述においても学生は、実際に自分の目で見た医療者と会話する島民の様子を記載していた。

2) 島民の生活や状況に沿った医療を行うことの重要性

島民の多くが漁業に従事しており、漁の時期には無理を

してでも働かなければならないことや、島では高齢者が非常に多い、医療者が病気だけを診るのではなく、患者さんの背景にも気を配っている様子などから、『島民の生活背景や状況に沿った医療の大切さ』を感じていた。また、看護師はじめ医療実習で接した多くの医療従事者が、島民の生活を理解し、生活のリズムに沿って対応している姿を見て、『地域で働く医療者はその地域を知ることが必要』であることに気づいた。

3) 地域医療への関心やモチベーションの向上

学生は、本実習で、地域で働いている医療者の様子の見学や、医療者の指導のもとでの簡単な補助的仕事を体験できる機会を与えられ、実際に地域医療に触れることができた。そして、直接体験できたことが『地域医療に対するモチベーションの向上』につながり、大変さと同時にやりがいのある仕事ではないかと思えるようになっていった。ま

た、医療者や島民と直接話す事ができた、コミュニケーションがうまくいかないという苦労を一方で感じながらも、彼らとの関わりの中で『島で働く医療者や島民からの刺激』を受け、様々な気づきを言葉にした。そして、その体験が「自分の将来のビジョンが見えてきた」、「単身で在学中に地域医療の診療所を回ってみたい」などの記述に見られるように『今後の展望と自己課題の明確化』につながっていた。

4) 医療者および札医大に対する島民の期待の大きさ

離島では医療者が不足しており、地理的に不利な条件の中で、学生は『島民の医療に対する期待』を知ることができた。さらに、このような土地に住む離島の住民が学生を温かく迎えてくれた背景には、自分達の将来に対する島民の熱い期待があることを感じ、『地域医療における札医大の役割』を意識していた。

5) 離島医療の現状の厳しさ

島の医療に関して島民や医療者から「島では子供が産めない」、「利尻の病院には理学療法士がいない」などの話し

を聞き、『離島の産科の現状』および『離島のリハビリの現状』に気づいた。

II グループ学習での発表記録

フォトボイス活動並びに合同発表会にむけてのグループ学習での発表記録から、生活体験・自然観察(表3)および医療実習体験(表4)における学生の気づきを分析した。学生の気づきの多くは、すでに述べたレポートの記載内容から抽出された気づきのカテゴリーと同様であった。以下にレポートからは抽出できなかったカテゴリーとサブカテゴリー(表3・4の網掛け箇所)について述べる。

1. 生活体験・自然観察における学生の気づき

1) 人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ

実習中に島民から受けた優しさについて、学生は『島民の優しさは無意識のもの』と表現していた。島民の優しさについては個人のレポートでも述べられていたが、その優しさの背景について、何かを意図して行ったことではなく

表3 生活体験・自然観察における学生の気づき【グループ学習での発表記録から】

学生の気づき		具体的な記述例
カテゴリー	サブカテゴリー	
人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ	島民の優しさは無意識のもの	「島民は当たり前のように助けてくれ、島民の優しさは無意識のものと感じた」
	島民どおしの支え合いと共有	「地域安全七夕に集いの短冊に書かれた文言から、人々がお互いの幸せを願っている事を知った」「人々は職種・出身地・年齢などの様々な枠をこえて協力して生活をしていた」「1500日も続いていた事故死0が実習の直前に破られてしまったが、会う島民の方々がそのことを皆悲しんでおり、悲しみが共有されていると思った」「高齢者が離島で暮らしていくためには、家族の支えはもちろん、地域全体が一体となって支援していくことが大切」「非常に多い高齢者を地域全体で支えていることを知った」
離島独自の生活習慣を把握する大切さ	離島ならではの生活習慣	「バスの時刻表を見て、自分達の生活のリズムと異なる事を知った」「家の軒先に重ねておかれたマキの山を見て、古き良きぬくもりを感じた」「利尻の時間は日の出とともに始まり、日の出とともに終わるように感じた」「この島ならではのことから利尻島の生活を知ることができた」「ガソリンが高い事に驚いたが、高くても車に乗らなければ生活できない現実を知った」「利尻では、人と仕事というのが大変密接に結びついていると感じた」
	地域の健康を支える陶芸教室	「フォトボイスで尋ねた陶芸教室が、単に陶芸を習う場所ではなく、地域の健康を支える場になっていることを知った」
今まで知らなかった離島の良さ	島に対する印象の変化	「利尻に行ってみて、不便は不幸ではないと思った」
島の仕事の大変さと人々の仕事に対する誇り	漁業の辛さ・大変さ	「ケガをしていても働かなければならない人々に会った」
	誇りを持って働いている島民への感動	「昔ながらの手法にこだわり誇りを持ってコンブの加工をし続けている事に感動した」
	漁業以外の仕事への理解	「利尻と言えばウニという理解しかしていなかったが、碎石場で働く人々を見て、水産業以外で生計をたてている人々がいることを知った」
島の仕事を支える家族の絆	家族で支える島の仕事	「ウニ漁は生活の一部であり、一家総出で働いており、最盛期の夏は寝る時間を削って働かなければならない」「昆布加工場で働いている人たちは女性が多く、実際に若者が少ない事を肌で感じた」「漁というのは漁師一人が獲物を引き上げることだけを意味するのではなく、他にも様々な作業があり、漁は家族全員でするものだと感じた」
	働く母を見て育つ子ども達	「仕事場で働く母親の側に子どもがいることから、母親の背をみて子どもは育つと思った」
島の自然の豊かさ	島の自然の豊かさ	「札幌は町の中で自然を探すのに対して、利尻は自然の中に町があると感じた」「夜の星は今まで見た事もないほど美しかった」

□ : レポートからは抽出できなかったカテゴリーとサブカテゴリー

表4 医療実習体験における学生の気づき【グループ学習での発表記録から】

学生の気づき		具体的な記述例
カテゴリー	サブカテゴリー	
医療者としての患者との関わりの大切さ	コミュニケーションの難しさと大切さ	「住んでいる人と実際に会話することが重要」「コミュニケーションの難しさを感じた」
	医療者と島民の近い距離	「医療者と患者の距離の近さを感じた」
	信頼関係の大切さ	「高齢者の方が、離島という環境で暮らしていくためには、支援する人とそれを利用する人の間に信頼関係が築かれることが大切」
島民の生活や状況に沿った医療を行うことの重要性	島民の生活背景や状況に沿った医療の大切さ	「長生きのための医療ではなく、生活に密着した生活を支える医療が大切」「診療所の実際の診療時間は、ウニ漁の有無、バス時間などに左右される」
	島民の考える医療への不安	「触れ合った島民の多くが医療への不安を口にした」
地域医療への関心やモチベーションの向上	地域医療に対するモチベーションの向上	「地域医療を志す上で大変勉強になった」「地域医療への関心が高まった」

□：レポートからは抽出できなかったサブカテゴリー

島民から自然に表出された“無意識的”なものであったと考えていた。さらに、島民のつながりの強さについて、七夕の短冊に書かれた文言や交通事故で亡くなった小学生の死をどの地域の住民も口にしており、「人々がお互いの幸せを願っていることを知った」「悲しみが共有されていると思った」など、より具体的な内容を示しながら学生自身が感じたことを表現していた。

2) 離島独自の生活習慣を把握する大切さ

離島の生活習慣を知ったことについて、レポートでは「ガソリンが高いなどの発見があった」と述べていたが、グループ学習の記録では「ガソリンが高いことに驚いたが、高くても車に乗らなければ生活できない現実を知った」と表現し、気がついた事実に留まらず、さらに踏み込んだ気づきの記述が見られた。また、フォトボイスで尋ねた陶芸教室で、学生は島の人々と一緒に陶芸を行ったが、主催者や利用者との話から陶芸教室が『地域の健康を支える陶芸教室』であることに気づいた。

3) 島の仕事の大変さ

「ケガをしていても働かなければならない」島の仕事の大変さに目を向けながらも、一方で仕事に対して誇りを持って働いている人々に気づいた。フォトボイス活動で訪れた昆布の加工工場で、仕事へのこだわりや誇りにも目を向け、「昔ながらの昆布加工への感動」と表現していた。さらに、グループ学習での発表記録では、利尻＝ウニと昆布との意識が強かった学生が、漁業以外で生計を立てている多くの島民がいることに気づき、『漁業以外の仕事への理解』もなされていた。

4) 島の仕事を支える家族の絆

このサブカテゴリーは学生のレポートには表されていない気づきである。漁業は漁師一人が行うものではなく様々な工程がある。ウニの殻割りや昆布の整形現場で多くの女性や高齢者が働いていることに気づき、『家族で支える島の仕事』についての気づきが見られた。さらに、子供

を背負って働く女性や、子供たちが母の側で母の仕事を見ている写真を撮影したことで『働く母を見て育つ子ども達』の存在に気がついた。

2. 医療実習体験における学生の気づき

1) 医療者として患者との関わりの大切さ

コミュニケーションの大切さや医療者と島民の距離の近さに加えて、離島という環境で医療者として島民を支えていく上で、支援する人とそれを利用する人との間の『信頼関係の大切さ』を感じていた。

2) 島民の生活や状況に沿った医療を行うことの重要性

グループ学習での記録では、多くの島民が島の医療に対して不安であることを口にしていたことに気づき、島民に沿った医療を行うことの重要性を理解していた。

考 察

学生が実習後に記述したレポートとグループ学習の発表記録から、学生の「気づき」に着目し、図1に示したレポートとグループ学習の流れにそって考察する。

地域医療は『地域を良く知る事から始まる』¹⁾、という考えの基に、離島地域医療実習が実施されており、初年度の離島実習において、参加した学生が多くの学びを得ることができたと報告されている²⁾。二年目の今回の実習においても、今まで自分が体験したことも見たこともない環境の中で住民と関わることによって、離島の暮らしを知ることの重要性に気づいたことが学生のレポートの記載から明らかになった。学生は、直接島民と接することによって、“人々の温かさ・優しさ、人々のつながりの強さ”に気づいた。半数以上の学生がこの点に関して記述しており、都会とは異なる人間関係の深さを実感したようであった。なぜ島民は優しいのか、島民同士のつながりの強さはどうして生まれるのかなどに言及した記述は見られなかったが、

今後、学生の記述にあるように「在学中に地域医療の現場をまわってみる」ことで、各自がその答えを見つけて行くことができると考える。また、これまで都会の生活と比べて「島の暮らしはつまらない」というマイナス面にのみ向けられていた関心が、実習中に人々と触れ合う中で、「島なりの楽しみ」や「島の元気さ」に気づき、島に対する印象のプラスの面への変化が見られ、地域を知る視点が広がっていった。さらに、学生は島の生活や自然に触れ、「驚いた、非常に貴重な体験だった」と表現していた。このことは、「自然の豊かさへの感動」という実感を伴う体験から得られた気づきとも言える。藤岡ら⁷⁾は、体験学習で最も大切なのは「気づき」であり、心を揺さぶられるような気づき、はっとするような気づきがあってこそ、より深く実感し理解につながると述べている。学生は利尻島で実感を伴った体験をし、その後のレポート作成や発表のためのグループ学習を通して島の生活の良さや不便さの両側面を捉えることで、利尻島の生活に対するより深い理解につながったと思われる。

医療実習では、「コミュニケーションの大切さや難しさ」、「人として患者を診る」など、医療活動において基本となる気づきばかりでなく、「漁が忙しいと病院に行けないことに驚いた」、「島の人達の生活に医療を合わせる必要性があると感じた」など島特有の医療の形に驚く気づきも見られた。田島⁸⁾は、看護行為は人とかかわり合いで成り立ち、クライアントは年齢・性差・個性・生活背景などに影響される健康をめぐるニーズをもっていることを認識して専門職者として関わらなければならないと述べている。医療職者として関わる際には、対象者の背後にある生活環境や家族について把握していなければ、よりよい医療を提供することはできない。本実習での体験は、対象者を中心とした医療の大切さを意識づけるきっかけになっていると考えられた。医学部生を対象とした早期医療体験実習の教育効果を「気づき」に着眼して分析した研究⁹⁾では、実習を通してコミュニケーション能力の重要性、医療と社会の関わり、患者と家族の関わり等について深く考える機会を持つことができたと評価していることが報告されている。このように、専門的な学習がほとんど行われていない低学年次学生においても、体験を伴う実習によって多くの気づきもたらされていることが裏付けられている。また、島の医療機関で働く人々はやりがいや誇りを持って働いている姿に触れ、自分の中にある地域医療への関心やモチベーションの向上に気づいた記述は、実際に現地に赴き、人々に触れ、体験しなければ意識されなかったものと考えられ、体験することの重要性を示していると考えられる。学生は、「島の人達の生活に医療を合わせる必要性」や「患者一人一人の性格や生活実態まで把握して人として患者を診ることの理解」という島特有の医療のあり方に気づいていたが、この背景には、実習を生活体験、医療実習の順序で行ったことが大きいと考える。島の生活や仕事の具体的な内容を経験

した生活体験で生じた驚きや感動が、「このような離島に住む人々の生活や風習、考え方、環境などその地域を知らなければいけないこと」の学びとなり、その後の医療実習体験が島民の生活と医療の密接なつながりへの理解になったと考えられる。我々は先に離島実習における体験内容の順序性も大きな学びの要因であると分析した報告⁶⁾を行っているが、2年目の実習でもこのことが確かめられた。今後、さらに学習の順序性の効果についても検討していきたい。

グループ学習後のフォトボイスや合同発表会の記録において、島民同士の支え合いや交通事故死ゼロの記録が1500日達成後の死亡事故に対する島民の悲しみの共有、そして家族総出でなされる島での仕事の様子から、“人々のつながりの強さ”や“人々の仕事に対する誇り”、“島の仕事を支える家族”について具体的な言葉で表現していた。さらに「仕事場で働く母親の側に子どもがいる」ことは、レポートでは記述のなかった内容である。レポートの記載という個人の作業では意識化されなかった視点や気づきが、写真を用いて話し合う、お互いの気づきを話し合うというグループ学習によって、より具体的で明確になり、表現の変化や気づきの広がりにつながっていったものと考えられる。フォトボイスは撮影した写真に撮影者の意図を表す言葉(ボイス)を付ける作業を伴うが、このような作業は学生の気づきを促すうえで有効な手段であったと考えられる。平成20年度より地域医療合同セミナーIに導入され、新しい教育方法としての効果が期待されている¹⁰⁾。我々も地域の生活および地域医療に対する学生の理解がより深まることを期待し、平成21年度よりフォトボイス活動を導入した。実習終了後、地域医療合同セミナーIのグループ学習の中で、写真(フォト)に対するボイスを付けていく作業の中で、自分の気づきを客観的にふりかえり、離島の生活や医療への理解を深めていた。

我々が学生に対して課した実習終了後の個人レポートの作成およびグループでの検討は、実習における体験の「気づき」を深める学習である。安酸¹¹⁾は、経験型実習教育では、学生に直接的経験を与えられる学習環境を設定し、その意味づけをする反省的経験の過程が促進されるような学習の場をデザインし、学生による探求が進むように援助していく教授活動が必要であると述べている。今回の実習で我々が学生に課したレポート課題とグループ学習は、反省的経験の過程が促進される場をデザインしたものと言えよう。このような体験の意味づけによって次なるステップにつなげていくことが可能になると考える。Kolb¹²⁾の経験学習モデルでは、具体的な体験を受け、抽象的な概念化、そして能動的な試みへ進むためのステップとして、内省的な観察=ふりかえりが位置づけられており、大学教育における「ふりかえり」能力の支援に対する教員の役割は大きい³⁾としている。今回のグループ学習では、各グループを1~2名の教員が担当した。フォトボイスのファシリテ-

ターとしての役割については、教員のための学習会を行い、学生の担当に当たったが、今後はふりかえりに対する教員のファシリテーションの方法³⁾について教員が学習し、ふりかえることの効果を高めていく教育方法を再検討していくことも必要であると考ええる。

ま と め

平成21年度離島地域医療実習の参加学生の実習後のレポートの内容およびグループ学習での発表記録を分析し、学生の「気づき」に着目して検討した。レポートの記述内容において学生は実習体験に基づく多くの気づきが得られていたが、グループでの発表記録では、さらに具体的な「気づき」の内容が記載されていた。「気づき」を促した要因として、実際に離島で島民の生活や医療の現場を体験したことに加え、実習後の個人レポートおよびグループ学習での話し合いを行ったことがあげられる。学生は気づきを言語化し、仲間と共有することで、利尻島に暮らす人々の生活や離島医療に対する理解を深めていった。

謝 辞

本学の離島地域医療実習にご協力いただきました利尻富士町および利尻町の役場や保健医療福祉施設関係の皆様、生活体験の機会を与えていただきました漁業部の皆様、水産会社の皆様、利尻島の歴史や自然についてご説明いただきました利尻町立博物館学芸員の皆様、自然探索やフォトボイス活動および離島での生活にご協力していただきましたボランティアの皆様、GP事務局の皆様、レポートの分析を承諾して下さった学生の皆様に深く感謝致します。さらに、地域医療合同セミナーⅠの後期の授業でグループ学習のファシリテーターとしてご尽力いただきました札幌医科大学保健医療学部の澤田いずみ先生、仲田みぎわ先生、同大学医療人育成センターの道信良子先生、同大学医学部の鷲見紋子先生、園田智子先生、元同大学附属総合情報センターの明石浩史先生にも感謝致します。

文 献

- 1) 山田恵子, 高橋延昭, 宮下洋子他: 医学部・保健医療学部1年生を対象とした利尻島における離島地域医療実習. 札幌医科大学保健医療学部紀要12: 37-43, 2009
- 2) 札幌医科大学医学部・保健医療学部: 特色ある大学教育支援プログラム「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」, 平成21年度報告書, 2009, p71-98
- 3) 和栗百恵: 「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—. 国立教育政策研究所紀要139: 85-100, 2010

- 4) 東中須恵子, 村木士郎, 岡本響子: 学生が考え実践できる臨地実習の工夫—経験型実習の試み—. 看護学総合研究11(2): 29-36, 2010
- 5) Wang C, Burris, M.A.: Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. Health Education & Behavior, vol.24(3): 369-387, 1997
- 6) 仲田みぎわ, 山田恵子, 高橋延昭他: 利尻島における離島地域医療実習から得た学生の学び—参加学生の実習後レポートの分析—. 札幌医科大学保健医療学部紀要12: 27-35, 2009
- 7) 藤岡完治, 野村明美編: シミュレーション・体験学習, わかる授業をつくる看護教育技法3. 東京, 医学書院, 2000, p133-134
- 8) 田島桂子: 看護実践能力育成に向けた教育の基礎, 第2版. 東京, 医学書院, 2004, p36-38
- 9) 後藤道子, 津田司, 横山和仁他: 振り返りを伴った早期医療体験実習の教育効果について—1年を通じたプロフェッショナルリズム育成の場としてのearly exposure—. 医学教育40(1): 1-8, 2009
- 10) 道信良子, 澤田いずみ, 今野美紀他: 札幌医科大学「地域医療合同セミナーⅠ」における医療職種理解のためのフォトボイスの活用. 札幌医科大学保健医療学部紀要12: 45-49, 2009
- 11) 安酸史子: 学生とともにつくる臨地実習教育, 経験型実習教育の考え方と実際. 看護教育41(10): 814-823, 2000
- 12) Kolb, D.A.: Experiential learning as the source of learning and development, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1984
<http://www.leraningfromexperience.com/images/uploads/process-of-experiential-learning.pdf>